

第1章 ■ AREホールディングスの価値観と強み

- 2 AREグループウェイストーリー
- 4 AREホールディングスの価値創造の歩み
- 6 価値創造の源泉とビジネスモデル/At a Glance
- 8 STRENGTH

第2章 ■ AREホールディングスが目指す価値創造

- 10 トップメッセージ
- 16 AREホールディングスの価値創造プロセスの全体像
- 18 中長期ビジョン
- 20 AREホールディングスのマテリアリティ

第3章 ■ 価値創造の実現に向けた事業の取り組み

- 22 事業紹介 ..... 貴金属事業
- 30 事業紹介 ..... 環境保全事業

第4章 ■ ESGの取り組み

- 32 **E** 環境 AREホールディングスの環境貢献
- 36 気候関連財務情報開示タスクフォース(TCFD)提言への対応
- 38 環境マネジメント
- 40 **S** 社会 事業戦略を支える人的資本
- 44 「責任ある貴金属管理」への取り組み
- 46 社会との関わり合い
- 48 **G** ガバナンス 役員紹介
- 50 コーポレート・ガバナンス
- 52 取締役の報酬等
- 54 コンプライアンス・リスクマネジメント
- 56 社外取締役座談会

データセクション

- 62 財務・非財務データ
- 64 グループ会社体系図/外部評価
- 65 会社概要/株式情報

編集方針

本レポートは、AREホールディングス株式会社の事業の全体像や考え方を中心に、事業を通じて社会的課題にどう立ち向かい、どのような価値を生み出していくのかを、広く、深く、皆さまにご理解いただくためのコミュニケーションツールとして作成しています。また、当社グループの具体的な事業内容や取り組みについても紹介することで、会社案内としての役割も兼ね備えています。

参考にしたガイドライン

- ・国際統合報告評議会 (IIRC、現IFRS財団) 「国際統合報告フレームワーク」
- ・経済産業省「価値協創ガイダンス」
- ・Global Reporting Initiative 「GRIスタンダード」

対象期間

2023年4月1日～2024年3月31日

対象組織

原則として、当社と連結子会社を含むグループ全体を対象としています。

数値とグラフに関して

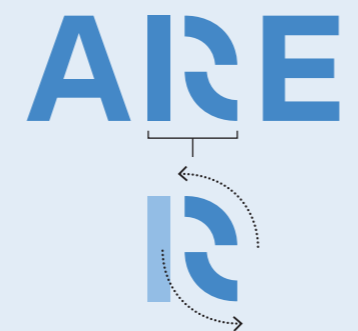
記載の数値は四捨五入の影響により、個々の数値と合計が一致しない場合があります。2016年度よりIFRSを適用しており、各項目名は基本的にIFRS適用後の表記としています。また、前年の2015年度よりIFRS基準での数値にて記載しています。

将来見通しに関する注意事項

本レポートには、当社グループの過去と現在の事実だけでなく、将来の計画や見通し、経営計画に基づいた予測が含まれています。これらは、記述した時点で入手できた情報に基づいて作成しています。したがって、実際の業績や活動結果は、将来の経営環境の変化によって大きく異なる可能性があります。

グループロゴについて

AREのAはAsahi (アサヒ)、RはResources (資源)、EはEnvironment (環境)の頭文字です。



社名をダイレクトに表現しつつ、「R」に円(サーキュラー)のモチーフを活用しています。

# AREグループウェイ



## この手で守る自然と資源

～限りある資源と地球環境を守り、持続可能な世界の実現に貢献します～



- 地球規模の課題解決と企業価値向上の両立
- すべてのステークホルダーから期待される事業成長と利益の実現
- 世界から信頼されるコーポレートブランドの確立



## 人を大切に

わたしたちは、安全と健康を何よりも優先し一人ひとりを尊重します

## 挑戦しよう

わたしたちは、失敗を恐れずチャレンジし、未来に革新を起こします

## 自ら考えよう

わたしたちは、現場・現物・現実と全体最適を拠り所として自ら考え行動します

## 追い求めよう

わたしたちは、より良い技術・品質・サービスを追求します

## 学び続けよう

わたしたちは、自己の成長と組織の発展のために学び、進化していきます

当社では2023年7月1日にAREホールディングス株式会社へと社名を改めたことに合わせ、従来の経営理念である「アサヒウェイ」を改定し、新たに「AREグループウェイ」を掲げました。次ページでは、この改定プロジェクトを取り巻くストーリーをご紹介します。

“アサヒウェイ”から“AREグループウェイ”へ

# AREグループウェイ

2024年7月31日にAREホールディングスの経営理念が「AREグループウェイ」として生まれ変わりました。すべてのステークホルダーに伝わりやすく、次世代を担う社員の共感を呼ぶ内容にしたいとの想いのもと、ボトムアップの議論が繰り広げられたAREグループウェイ策定の背景に迫ります。

## AREグループウェイ策定プロジェクト、始動

2023年度はアサヒホールディングスからAREホールディングスへの社名変更、アサヒプリテック社の3分社化、2030年度に向けた中長期ビジョン策定が重なるタイミングであり、社員の中から「会社が大きく変わるこの機会に経営理念のアップデートをしてはどうか」という声が上がりました。この意見はすぐに経営陣の賛同を得て、次世代を担う若手社員・中堅社員を中心に、幅広い職能や年齢層のメンバーがグループ各社から選出され、アサヒウェイからAREグループウェイへの改定プロジェクトが立ち上がったのです。

## 原点に立ち返り、メンバー全員で意見交換

プロジェクトメンバー15名を3つのグループに分け、まずは各グループ内で既存のアサヒウェイの「良い点」「見直したい点」を次々に挙げていきました。経営理念の本質を損なわず、現代から未来へと繋ぐウェイとするため、メンバーはこの間、地球規模の課題やテクノロジーの進展に関する学びを通じ、未来社会に対する問題意識を高め、急速に変化する時代の流れの中で当社はどうあるべきかを議論していきました。

グループ内での議論を経て全メンバーが一堂に会した話し合いでは、グループ間の意見交換の中で、アサヒウェイの「良い点」「見直したい点」について共通認識が形成される一方で、「そもそも経営理念とは何なのか」「アサヒウェイは誰に向けた言葉なのか」といった、ウェイの根本に迫る本質的な議論にも踏み入りました。こうした素朴な疑問は、若手社員のフレッシュな視点や、メンバー同士で忌憚なく意見を言い合える場の雰囲気があったからこそ生まれたものです。メンバーで推敲されたAREグループウェイ案は経営陣との意見交換会でさらに議論され、そこで受けたフィードバックを基に再びメンバー内で議論。このプロセスを4ヶ月間にわたって繰り返し、集大成としてAREグループウェイが完成しました。

## 各自の想いをのせ、誰にでも伝わる言葉に

改めてアサヒウェイを振り返りそこに込められた想いに触れ、メンバーたちも「いま、自分たちが大切にすべきもの」を再確認しました。社会における当社の存在価値を表すパーパスについて、「変える必要はあるか」という議論がありながら、アサヒウェイの表現を継承することにしました。かつて社内公募によって誕生した「この手で守る自然と資源」という表現は、自分たちの根幹として持ち続けたいという結論に至ったためです。

パーパスの実現に繋がる行動指針として設定したバリューズは、社員が受身の姿勢ではなく、自ら考えて行動

# ストーリー

することを期待する内容とし、また表現も次世代の共感を呼ぶ、より平易で簡明な言葉にする方針で議論がまとまりました。これまで「わたしたちが社員として心がけること」の筆頭に掲げ大切にしてきた「革新と挑戦」は引き継ぎつつも、今回のバリューズの一つ目は思い切って「人を大切に」へと変更。最後の5つ目に掲げた「学び続けよう」の言葉は、「時代の変化に対応できる個人となるべき」との考えに基づき、未来に通用するウェイとすることを意識して盛り込んだものです。このようにメンバー同士が意見を交わし、ぶつけ合いながら、伝わりやすい表現のみならず掲載の順序に至るまで、細部にこだわって策定を進めました。

当初、メンバーが想定していたAREグループウェイの構造は、当社の存在意義としてのパーパスと、その内容を具体的な行動指針に落とし込んだバリューズ、というシンプルな二段構成でした。しかしパーパスとバリューズの間

に、社外に向けたメッセージとして、パーパスを実現するための具体的なコミット

メントもあった方がより完成度の高いウェイになるのではないか。経営陣からのそのようなアドバイスを受け、ステークホルダーの方々をはじめ社外の方々に対するメッセージを、ゴールズとして明文化しました。

## ストーリーを共有し、ウェイの体現へ

AREグループウェイの大きな特長として、バリューズを「～しよう」という形で表現した点が挙げられます。また各バリューズに添えられた補足説明は、全て主語が「わたしたち」となっています。読み手が自分ごととして捉えやすく、また行動に移しやすい表現を用いることで、将来の当社を担っていく若手社員たちへの浸透を期待するものとしています。

ウェイが形になったいま必要なのは、改定に至った経緯や議論の過程など、策定の背景にあるストーリーを全社員と共有することです。経営層からの発信もさることながら、策定に関わったプロジェクトメンバーが多様な顔ぶれであるからこそ、メンバー各々の周囲に対する発信が大きな意味を持つはずです。地球規模の課題解決と私たちの業務とが地続きであることを表現した新しいウェイを、日々の、そして大きな決断に際しての、社員の行動指針と言える存在にするために、これからも取り組みは続いていきます。

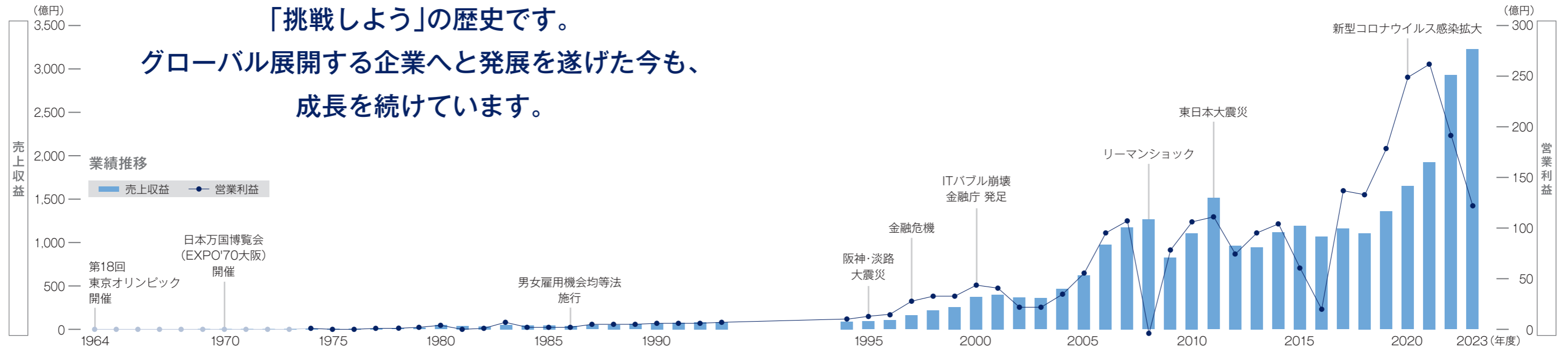


創業から70年を越えた私たちの歩みは、

「挑戦しよう」の歴史です。

グローバル展開する企業へと発展を遂げた今も、

成長を続けています。



**I 創業**      **II 株式公開**      **III 新たな発展へ**

<p><b>1952</b> 大阪市城東区に「朝日化学研究所」を創立</p> <p><b>1964</b> 株式会社へ組織変更</p> <p><b>1974</b> 福岡営業所開設 以降全国各地へ営業所を展開</p> <p><b>1978</b> 神戸市東灘区に本社社屋を竣工</p> <p><b>1997</b> アサヒプリテック(株)に社名変更</p> <p><b>1998</b> 本社機能を神戸市中央区に移転 研究開発施設テクノセンターを神戸市西区に開設</p>	<p><b>1999</b> 店頭市場に株式公開</p> <p><b>2000</b> 東京証券取引所第二部に株式上場</p> <p><b>2002</b> 東京証券取引所第一部に株式上場</p> <p><b>2009</b> 持株会社アサヒホールディングス(株)を設立</p>	<p><b>2012</b> アサヒウェイを制定 東京証券取引所ESG銘柄に選定される</p> <p><b>2015</b> 監査等委員会設置会社へ移行 指名委員会と報酬委員会を設置 業績連動型株式報酬制度を導入</p> <p><b>2016</b> IFRS(国際会計基準)を適用</p> <p><b>2017</b> 新株式発行等による増資を実施</p> <p><b>2018</b> アサヒウェイを全面改訂</p> <p><b>2022</b> 東京証券取引所プライム市場に移行</p> <p><b>2023</b> AREホールディングス(株)に社名変更</p> <p><b>2024</b> AREグループウェイを制定</p>
---	---	--



**貴金属事業**

<p><b>1952</b> 写真定着液からの銀のリサイクル事業を開始</p> <p><b>1975</b> 小型電解回収装置「プラタ」を開発</p> <p><b>1982</b> デンタル分野からの貴金属リサイクル事業を開始</p> <p><b>1984</b> メッキ分野からの貴金属リサイクル事業を開始</p> <p><b>1986</b> 電子材料・宝飾分野からの貴金属リサイクル事業を開始 小型電解式金回収装置「ジパング」を開発</p> <p><b>1994</b> マレーシアにASAHI G&amp;S SDN. BHD.を設立</p> <p>「プラタ」シリーズ</p>	<p><b>2003</b> 自動車触媒事業を開始</p> <p><b>2006</b> 韓国アサヒプリテック(株)を設立</p> <p><b>2011</b> Eスクラップ事業を開始 精密洗浄事業を開始</p>	<p><b>2015</b> 英ジョンソン・マッセイ社から北米(米国・カナダ)の金・銀精錬事業を買収し、Asahi Refining USA Inc.とAsahi Refining Canada Ltd.を設立</p> <p><b>2019</b> Asahi Refining Florida LLCを設立</p> <p><b>2021</b> Asahi Depository LLCを設立</p> <p><b>2022</b> 茨城県坂東市に坂東工場竣工</p> <p><b>2023</b> アサヒメタルファイン(株)を設立</p>
--	--	--



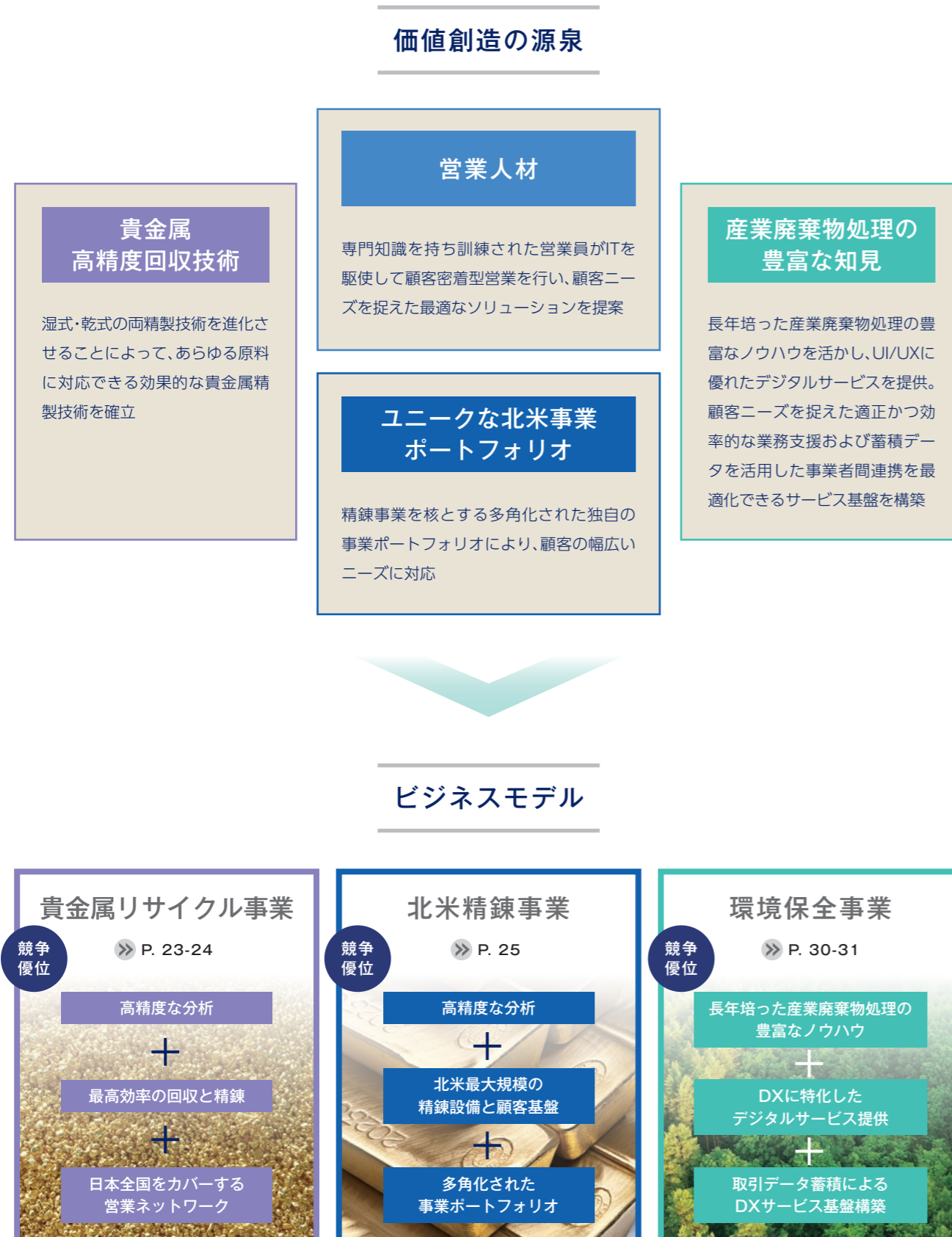
**環境保全事業**

<p><b>1972</b> 写真廃液の無害化処理施設を神戸工場に設置</p> <p><b>1975</b> 神戸市の産業廃棄物中間処理業許可を取得(有害物を含む写真廃液無害化処理)</p> <p><b>1978</b> 環境計量証明事業所の登録</p> <p><b>1990</b> 写真廃液以外の環境保全事業を開始</p>	<p><b>2004</b> 日本ケミテック(株)がグループに加わる</p> <p><b>2007</b> (株)太陽化学がグループに加わる</p> <p><b>2008</b> アサヒプリテック北九州事業所を設置 ジャパンウェイスト(株)を設立 富士炉材(株)がグループに加わる</p>	<p><b>2010</b> ジャパンウェイスト横浜事業所を設置 エコマックス(株)がグループに加わる</p> <p><b>2017</b> 日本ケミテック(株)とエコマックス(株)をジャパンウェイスト(株)に統合</p> <p><b>2021</b> アサヒプリテック(株)がジャパンウェイスト(株)と(株)太陽化学とを吸収合併 DXE(株)を設立</p> <p><b>2023</b> ジャパンウェイスト(株)に社名変更</p> <p><b>2024</b> ジャパンウェイスト(株)と(株)レナタスの株式交換を実施</p>
---	--	--



## 価値創造の源泉とビジネスモデル

AREホールディングスは、「この手で守る自然と資源」というパーパスのもと、「AREグループウェイ」を企業理念として掲げています。挑戦を重んじるこの理念と、長年培った強みを基盤に、持続可能な価値創造と安定したビジネスモデルを実現しています。



## At a Glance

### 財務データ

売上収益	3,223 億円
営業利益	124 億円
ROE	21.0%
親会社の所有者に 帰属する当期利益	245 億円
基本的1株当たり 当期利益	319.54 円
資産合計	3,180 億円
資本合計	1,265 億円
自己資本比率	39.8%
1株当たり親会社 所有者帰属持分	1,650.2 円

### 研究開発

研究開発費 4.3 億円

### 拠点

国内 24 拠点 海外 10 拠点

### 環境貢献

CO<sub>2</sub>排出量2015年度比 **31%**削減

電力・ガソリン使用量 **前年比ダウン**

貴金属リサイクル  
によるCO<sub>2</sub>削減効果※1 **4,283** 万本分

● 森林の温室効果ガス吸収量  
に換算すると

**25,196** ha

琵琶湖の約3分の1に相当

削減効果 **60.0** 万t-CO<sub>2</sub>

出典：環境省 林野庁「地球温暖化防止のための緑の吸収源対策」より算出  
※1 当社グループにおける貴金属リサイクルによるCO<sub>2</sub>排出量と、同量の貴金属を鉱山由来の原料から生産したと仮定した場合のCO<sub>2</sub>排出量の差を示しており、当社グループのCO<sub>2</sub>排出削減量を示すものではありません。

### 従業員数

連結(海外含む) **952**人

● 女性比率 **12.8%** ● 海外比率 **38.3%**

### ワークライフバランス

インターバル勤務達成率  
(11時間以上)※2 **99.9%**

育児休業取得率※2 ● 男性 **38.5%**  
● 女性 **100%**

※2 国内グループ会社対象データ。

## AREグループウェイを基盤とする私たちの強み

### 人を大切に

#### 信頼と絆の継承

当社の発展を支えてきたのは、言うまでもなく従業員との信頼関係です。家族経営だった「My Company」の時代、それから従業員とともにさまざまな変化に対応してともに新しい事業を作り上げてきた「Our Company」の時代を経て、上場企業として、株主をはじめとする他のステークホルダーの皆さまを強く意識する「Your Company」の時代へと変遷してきましたが、その間、私たちは将来のグローバル化も見据えて多彩な人材の採用を積極的に進め、同時に当社の伝統的価値観である経営理念や行動指針をまとめた「アサヒウェイ」の共有を図ることで、強い使命感や高い倫理観を維持してきました。その価値観は、今回新たに策定した「AREグループウェイ」にも引き継がれています。

また、公正・公平な評価と成果主義を通して処遇の改善を図り、自己申告制度や満足度調査なども導入しながら、仕事のやりがいとワークライフバランスに留意することで、従業員との信頼関係をサステナブルな関係へと強化してきました。AREグループウェイのバリューズにも一番最初に「人を大切に」を掲げており、身体と心の健康を何よりも優先しています。多様な人材がいきいきと働くことが、さまざまな事業環境の変化による困難を乗り越える礎となっています。時代の変化とともに成長して、さまざまな事業環境の変化による困難を乗り越える礎となっています。

### 挑戦しよう

#### 事業のスクラップ&ビルドを実践

当社は1952年の創業以来、一貫して循環型社会の形成に資する事業を推進し、今ではグローバルに事業を展開する企業へと発展を遂げました。

当社の歴史を振り返ると、「挑戦しよう」の連続でした。写真定着液からの銀のリサイクル事業により創業し、1975年に日本で初めて、有害物を含む写真廃液の無害化処理ライセンスである「産業廃棄物中間処理業許可」を神戸市から取得しましたが、これが、当社事業を全国規模へと広げていくことになりました。

その後、さまざまな難局を乗り越えながらも、デンタル・宝飾・エレクトロニクス・触媒といった銀以外の貴金属も扱う分野に貴金属リサイクルの対象を広げるとともに、新規事業創造にも挑戦してきました。また環境保全事業を中心に、この20年間で約20社の企業の買収を行ってきました。加えて北米の精錬会社の大型買収も行った結果、当社の事業ポートフォリオは大きく変容しました。

一方で収益性や成長性、シナジーの観点から、当社において継続すべきではないと判断された事業からは、躊躇せず早期に撤退しました。利益の出ていた写真感材事業ならびにライフ&ヘルス事業からの撤退がその事例です。創業から70年以上、「挑戦しよう」を事業のスクラップ&ビルドを通じて実践してきたのです。

### 価値創造を支える8つのファクター 歴史の中で育んだAREの強み

<p><b>1 変化への対応力</b></p> <p>事業環境やライフサイクルに注視し、柔軟な発想と果敢な行動力、スピード感のある意思決定で、独創性のあるビジネスモデル構築や、衰退期の事業からの素早い撤退を進めてきました。この対応力によって、成長を維持し続けています。</p>	<p><b>2 業界をリードする「独自の技術」</b></p> <p>高度な分析力と高い効率で貴金属を回収する技術、顧客のニーズを的確に捉えて商品開発を進める技術を誇ります。不断の研究開発により、各事業分野で“独自の技術”を磨き続けています。</p>	<p><b>3 価値観を継承する多彩な組織</b></p> <p>当社グループ共通の価値観である「AREグループウェイ」を共有し“人を大切に”“挑戦しよう”のマインドに満ちた従業員が成長を担ってきました。積極的に人材へ投資し、価値観を共有できる組織づくりを続けています。</p>	<p><b>4 ステークホルダーとの良好な関係</b></p> <p>投資家との対話を積極的にを行い、顧客や取引先の声に耳を傾け、ガバナンスの強化、商品・サービスの開発に活かしています。従業員はもとより地域との信頼関係を大切に、長期的な企業価値の向上に取り組んでいます。</p>
<p><b>5 事業を再生する経営力</b></p> <p>過去20年間で、20社以上の会社をM&amp;Aでグループに取り込み、経営改善を進めてきました。事業環境に合った柔軟な経営力によって、ほぼすべての会社がグループ入り前より業績を伸ばし、さらなる業績向上を進めています。</p>	<p><b>6 信頼されるアサヒブランド</b></p> <p>当社グループの貴金属製品は、確かな品質が世界で高く評価されています。すべての事業において、クオリティの高い製品とサービスを提供し続けることで、信頼されるアサヒブランドを築いてまいります。</p>	<p><b>7 グローバルに広がるネットワーク</b></p> <p>1994年マレーシアに現地法人を設立して以降、韓国などアジア各地に進出しました。2015年には北米の精錬事業をM&amp;Aにより取得し、対象顧客は世界各国に広がっています。</p>	<p><b>8 高いマーケットシェア</b></p> <p>顧客や取引先の皆さまに満足していただくことを第一に考え、製品・サービスの向上に努めてきました。幅広いニーズに応えることができる営業力・技術力はお客様からの信頼を獲得し、高いマーケットシェアを実現しています。</p>

### スピードを重視した事業改革の推移

